



▲新聞に載せるのは1枚だが、「めぐるう」や人の並び方、ポーズ、角度などたくさんの写真を撮ることに驚いた。普段見ている新聞の写真はとも多くの中から選び抜かれた写真なのだとすると、他にどんな写真を撮ったのか、想像するようになった。



▲10年続く「めぐるう」取材してくれた読売新聞社の編集局社会部記者・石原宗明さん。初めは緊張で固まっていた私達も石原さんの話術によって、驚くほど話が引き出されていった。

すごく話が
しやすかったです！



▲話術がすごい!! 私たちからたくさん話を引き出すのに、けて自分が主役にならない(話をし過ぎない) バランスが絶妙。

たのは石原さんの持つカメラである。普通のデジタルカメラや一眼レフ内蔵のフラッシュとは違い、ストロボの部分が2段に分かれていた。よくTVの記者会見で見るフラッシュの光量の強さは、そもそも普通のカメラとは違ったからだった。もちろん記者会見などで、カメラの台数が多いのは普通だし、それでも、その特殊なカメラの持つストロボの光の強さは、私たちにちょっとした緊張感を持たせた。ただ集合写真を撮っているだけだったが、私たちは取材を受けているという実感を持った。最後に少し、石原さんと雑談をして取材は終了した。取材終了から4日後、私たちが新聞記事になった。編集員の中には親御さんが記事が載っている新聞をたくさん買ってきたり、友人から言われたりと反響は大きかったようだ。自分たちも新聞に載るなんて一生に一度あるかないかの経験だからと、みんな最低一部は確保している。

●全体を通して、プロの方々のレベルの高さに驚いた。取材の時、滞りのない進行や話を引き出す技術の高さ、そしてこれらを当たり前のように行う姿には頭が上がりなかった。また、素早くかつ読める程度に書いてあったノートは参考になったと思う。実際に記事を見て、あの短時間の取材でここまで立派な記事になっていたことに驚いた。また、「主な特集」という表で、「めぐるう」の記事のうどれが主要なものなのか、客観的な意見が得られて興味深かった。今後も、載った新聞記事に恥じないよう、精進していけたらと思う。(崇大) ●私は「めぐるう」のことが新聞に載った時、まさかあれほど大きな記事になるとは思っていなかった。初めて感動的だった。それともう一つ感心したのは、記者が緊張してる私たちの雰囲気を手早く和ませることができるということ。最初はガチガチに緊張していたら人も最後は話し過ぎだろうってぐらい話していたので、これがプロの記者とそうでない私たちの違いなのだと痛感させられた。と同時に自分が目指す記者にもなりました。(篤輝) ●印象的な事が3つあります。まず「ボイスレコーダーをセットしていなかった」点です。当日の記録はメモのみで行われました。何故かと言うと「例えば何かの会見だった場合はボイスレコーダーを使うが逆に設置してしまうと相手が緊張してしまう場合があるから状況や人に応じて使い分ける」のだそうです。次に「情報の整理」の点です。驚いた事に私達が知らなかった事、時間内では話せなかった事も載っていました。後日改めて調べて下さったのだと思います。紙面を見てこちらが知らなかった情報を新たに発見させられました。最後に「もどかしさ」を感じた点です。記事内に後で調べて下さった内容からの抽出もありました。私達も関わっていた物なのでまだまだ話足りなかったなと思います。そこが取材される側になったからこそ理解できたもどかしさでした。滅多に体験できないこの経験を生かして今



後の記事づくりに生かしてくれれば良いと思います。(正矩) ●記事に載せる写真を撮っていただいたことが印象に残りました。私たちのポーズや冊子の並べ方、写真を撮る角度などさまざまなパターンで撮っていて、こんなにたくさん撮るのかと驚きました。記事に載った写真はそこから選び抜かれたものだと思うと、この紙面の他に一体何パターンものがあるのだろと考えずにはいらませんでした。今回取材をしていただいたことで、いつもとは真逆の貴重な体験をすることができました。これからの活動の中で、少しでも多くこの経験を生かしていきたいです。(琴里) ●ついに「めぐるう」が取材される側に…!! 記者の方から、質問がスラスラと出てきてびっくりしました。すごくインタビューし慣れているんだな、と思いました。あまり「めぐるう」の記事と変わらない感じがして不思議でした。(慧理那)